

佐陀神能

佐陀神能は清めの神事として奉納される舞で、毎年9月下旬に2日間かけて松江北部の佐陀神社で行われます。この舞は、神社の神々が座するための莫座（ござ）の交換を祝う神事の一環です。これらの舞は、活気溢れる色彩豊かな神道の神楽の舞と、能から引き継がれたより洗練された要素を混ぜ合わせたもので、掛け声、笛、および太鼓の音に合わせて踊られます。能の要素は、京都で当時の能の様式を学び、佐陀に帰ってこの地元版を考案した、佐陀出身の神主宮川秀行により、17世紀初頭に加えられました。

野外公演

佐陀神社がいつ創建されたかはよくわかりませんが、史料の記述から、8世紀初頭には存在していたことが分かっています。この神社は、3つの本殿が並んで建ち、それぞれが屋根付きの廊下と門で結ばれているという珍しい構造をしています。これらの本殿は1807年に大社造様式で建てられたもので、重要文化財に指定されています。9月の舞は、境内の本殿近くの屋根付きの野外の舞台で、地元住民、神主、およびその他の地元の神社からの参加者によって奉納されます。約15の舞があり、アマチュアによる舞ではありますが、極めて高いレベルのものです。

舞の中の神道神話

神事の初日である9月24日には、夜に七座という神事が奉納されます。これは7つの舞で、新たな莫座を清めるためのものです。参加者は莫座を担いで3つの本殿の急階段をあがり、その後神主の長が入って扉を閉め、莫座を交換します。その間参加者は下から掛け声をあげます。

次の日の催しでは、莫座の交換の神事が完了したことを祝い、夜に3つのお祝いの舞が奉納されます。これらは能から引き継がれたもので、式三番と呼ばれています。それが終わると、神道の神話を題材にした活気溢れる舞が、仮面をつけた踊り手によって奉納されます。中でも特筆すべき例は八重垣で、スサノオノミコトが8つの頭を持つ蛇ヤマタノオロチを倒す場面が再現されます。こうした人気の舞では、色鮮やかな衣装、驚くほどドラマチックな仮面、刀を使った振り付けなどのダイナミックな動き、そして善と悪の戦いを見ることができます。

生き続ける舞の伝統

17世紀に佐陀神能が始まったことは地元の神社の舞にも大きな影響がありました。その影響は地域一帯に広まり、今日でも奉納され続けています。しかし、日本社会の高齢化により、新世代の踊り手がこの伝統を確実に続けていくことが難しくなっています。

す。1919年に発足した保存会の活動により、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定され、2011年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。